

れきし散歩

—世界に冠たる明治生まれの亀山人— 映画監督衣笠貞之助と言語学者服部四郎 服部四郎、故郷の方言から始まった日本語研究

はじめに

歴史博物館で現在開催中の企画展「—世界に冠たる明治生まれの亀山人— 映画監督衣笠貞之助と言語学者服部四郎」では、いよいよ最後の展示、第3部「服部四郎、故郷の方言から始まった日本語研究」が、2月7日(土)から始まります。



—高時代の服部四郎

そこで、今回のれきし散歩では、展示します服部四郎の遺品から、故郷亀山でのことや、言語学者としての事績について紹介します。

小学校時代の服部四郎

服部四郎は、明治41(1908)年5月29日に生まれました。その後、四郎は、大正4(1915)年4月、鈴鹿郡亀山第一尋常高等小学校(現在の亀山西小学校につながります)の尋常科に入学します。

大人になってから、服部四郎は、小学校の担任であった柴田先生との当時の思い出話を録音しています。その中で、先生は「几帳面で真面目で、試験の答え合わせは、四郎の答案を模範解答として丸付けをした」と語っています。“とにかく勉強がとてもよくできる子”という印象があったようです。

この点について、服部四郎自身は「几帳面なのは、とても厳しかった母の影響があったかもしれない」と語っています。

言葉の違いを聞き分ける

四郎は、小学生の頃から、自分の両親や学校の友達の話す言葉が、出身地が数キロ離れているだけの距離にもかかわらず、違うことに気付いています。また、この頃にローマ字に興味を持ち、ローマ字の綴りからS I「スイ」、T I「ティ」、T U「トゥ」というように発音できることを知ったり、夏の夕涼みで友達とT Y A「テャ」、T Y U「テュ」、T Y O「テョ」などの難しい発音の競争をして遊んだそうです。

このように、小学生の頃から言葉に非常に強い興味と関心を持っていました。

言語研究の広がり

大正10(1921)年3月、亀山町亀山尋常高等小学校の尋常小学校を卒業した四郎は、三重県立津中学校を1年早い4年で卒業、その後、第一高等学校、東京帝国大学文学部言語学科と進み、昭和6(1931)年に大学を卒業しました。卒業後、研究室に残った服部四郎は、学術振興会の奨学金を得て、昭和8(1933)年から昭和11(1936)年まで、日本語の起源(日本祖語)を求めて単身モンゴルへ赴きました。この調査で、ロシア語、タタール語、ブルアット語、蒙古語などを修得しながら、その言語を研究する中で、長い間、調査の手伝いをしてくれたマヒラさんと結婚し、帰国しています。



ハイラルでの結婚式と祝福の布

その後、同大学の講師、助教授となり、昭和18(1943)年、論文「元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究」で文学博士の学位を授与されました。

服部四郎の研究は、日本祖語を探すことにありますが、音声言語を収集分析する方法を行い、そのために、アジア言語、沖縄方言、アイヌ方言の広範な言語や方言を録音収集しました。



昭和44(1969)年に教授を退官後も言語研究を続け、学問を通じた日本文化への貢献が認められ、昭和58(1983)年に文化勲章を受章しています。

故郷の言葉

服部四郎は、平成7(1995)年1月29日、86歳で死去しますが、終生続けた日本祖語を求めた背景には、自分自身が、また周囲の人が話していた亀山町の言葉が心の中に存在し続けていたのでしょう。